

經濟論叢

第156卷 第5号

哀 辞

故平田清明名誉教授遺影および略歴

- | | | |
|--|-----------------------------|----|
| 日本型経営システムにおける労働管理…………… | 吉 田 和 男 | 1 |
| ネットワーク外部性とシステム互換性…………… | 依 田 高 典
廣 瀬 弘 毅
江 頭 進 | 17 |
| フィリピンにおける現地系大手食品企業による
養鶏インテグレーションの形成…………… | 大 江 徹 男 | 38 |
| 労働市場の時間と人数に関する非定常推定…………… | 宮 崎 憲 治 | 59 |

追 憶 文

- | | | |
|------------------|---------|----|
| 平田清明さんを偲ぶ…………… | 菱 山 泉 | 82 |
| 永遠に学問の灯かがやけ…………… | 八 木 紀 郎 | 86 |
-

平成7年11月

京 都 大 学 經 済 學 會

経済論叢（京都大学）第156巻第5号，1995年11月

〈追憶文〉

平田清明さんを偲ぶ

菱 山 泉

平田清明さんは、私が交遊した経済学者のうちで、鮮明な個性をもった真に独創的な研究者であった。

私が、平田さんの研究に深い畏敬の念を抱くようになったのは、彼の処女作といつてよい大著『経済科学の創造』（岩波書店，1965年）の「書評」（『経済研究』17巻2号，1966年4月）を書いたことによる。

フランス革命を展望する広い文明史的スケルトンの中に、精緻で決定的なケネー「経済表」分析を位置づける平田さんの本格的な研究は、私にとって衝撃的な感動をよびおこした。これより約10年前に、スラッフアの理論上の処女作「生産費用と生産量の関係について」（*Annali di Economia*, II, 1925）が私によびおこした深い衝撃は、これとはやや違うけれども、平田さんの著作から受けた感動は、それに引けをとらないものであった。

平田さんは、遺著『市民社会とレギュレーション』（岩波書店，1993年）のなかで、イギリスの政治学者ジェソップ（B. Jessop）を引照しながら、経済社会研究に適用される multi dimensional で pluri causal な分析に言及されているが、こうした分析こそ、実は平田さんが、ケネー－マルクス－グラムシの思想から学びとり、名著『経済科学の創造』で駆使されたものにほかならないように思う。

平田さんの開拓されたオリジナルな方法論的意識が、われわれの立つポスト・ケインジアンのもので一見して違うのは、この著作の言葉で表わせばこうなるだろう。「科学創造者の政策的立言は、つねに、当代社会に対する文明批判としての深さと広がりを持つ。この深さと広がりにおいて政策論が顧みられるとき、政策論的アプローチはそれ自体の自立性を主張しえない。……歴史的省察に支えられた政策論的自己主張、それを本書は時論的意識と呼ぶ」。こうした時論的意識にもとづく平田さんのあくことを知らない触手は、古典のあらゆる側面、ケネーについていえば、軍事・農業・交易・財政金融・政治・国家体制を捕捉する。われわれとしても、こうした多元的で pluri causal な

時論的意識を重要としなければならない。

平田さんが、マルクス研究者としては、「市民社会派」の創立者の一人とみなされているのは周知のことである。平田さんの創見が、現実にたいする直観と古典読解との緊張関係から生まれたことは、ほぼ間違いないだろう。平田さん自身、自分の仕事の意義について、淡淡とこう語っている。「私は1968年、レーニンの解釈の制約下にあるマルクス研究状況の中から「所有」、「交通」、「市民社会」、「個体的所有の再建」を失われた範疇ないし命題として検出した（平田清明、『市民社会と社会主義』岩波書店、1969年、引用者による補遺）……〔この著作は、こんにち眼前に崩壊し去っていった体制が何であるかを、その体制の——日本を含めての——思想的暴圧下において摘出することにつとめたものである〕（『市民社会とレギュレーション』109-10ページ）。こうした歴史認識に裏打ちされた文明批判としての市民社会論は、もちろんソ連社会主義体制の批判に関わるだけでなく、資本主義体制をも視野に入れた、より広い体制の文明批判的意識を担うものと解すべきであろう。

1978（昭53）年に、平田さんを京大経済学部の経済原論担当教授として、お迎えする幸運にめぐまれた。それまでは、論著を通して遠くから畏敬の念を抱いた平田さんと、文字通り人格と言説を通して直に交わり、その温かい真摯な人がらに接しえたことは、私にとってこのうえもない幸せであった。

大学紛争の余じんがまだ冷めやらぬ時代であったが、一夕、学部の研究発表会が京大大会館で催されたことがある。私が、当日の報告者でスラッファ体系をテーマにした。私の報告についてコメントした平田さんの言葉が今でも私の脳裏に焼きついている。「スラッファの理論構成がグラムシに似ている面がある」。この言葉をどう解くか、それ以来、これが私の心に引っかかっている。それについて、私は今ではこう考えている。

マルクスを含めて古典派体系、なかでもスラッファの古典派体系は、新古典派の一般均衡理論と違い、自由度のある体系である。スラッファの場合、何が自由度を閉じるかといえば、それは、資本と労働とが社会的政治的に対立交渉し妥協に達する場である所得の分配関係である。分配が確定しなければ、スラッファ体系は決定（完結）しない。おそらく平田さんは、グラムシ-レギュレーション派のラインから、資本・労働（プラス国家）の制度的妥協として分配要因を考え、こうした分配が先決することによって体系の切れたループが閉じることを直観的に捉えたのではなからうか。こうした体系の決定様式は、たしかにグラムシに似た面がある。

さて、現代の世界と日本の経済社会を対象とした遺著（『市民社会とレギュレーション』）を読んでみると、平田さんは、いま述べた完結する体系として、スラッファのように「生産の年々の循環」（annual cycle of production）ではなく、中・長期的に発展しない蓄積を遂げていく体系を構想していたのではなからうか。現代のポスト・ケインジアンの中で、こうした次元で体系を構想している傑出した研究者に、スラッファの「小体系」（sub-systems）に深く学んで長期発展の理論（『構造動学』）を構築したパシネッティ（Luigi L. Pasinetti）があるといってよい。

ここで、平田さんの遺著のいくつかの文脈に顔を出す次の言葉を引用してみよう。「『会社』を名のる企業が政党活動を資金的に左右し、社会的・文化的運動に大きな影響を及ぼしていることは、日本資本主義を特徴づける特異的エレメントである。政・財・官ブロックが市民社会におけるヘゲモニーを制圧し、政治社会における立法装置を制御している。そこで策定される蓄積戦略が日本資本主義の成長様式を規定している」（前掲書113-14ページ）。先にあげたポスト・ケインジアン発展理論、なかんずくパシネッティの構造動学の枠組みに、こうしたヴィジョンをいかに組み入れることが可能か。これは、われわれにとって interesting な問題といわねばならない。

京都の西山にある竹林の居宅をこよなく愛した平田さんのご家族に、京大時代の一夕、私も夫婦が招かれた日のことが懐かしい。桂昌院が建立した寺院を訪れ、暮れなずむ西の京の夕景色をめでた後、平田さん宅で、フランス・ワインに舌鼓を打ち、食後の一時、ご息子のフルートの調べを楽しんだことが、ついこの間のように思いおこされる。亡くなられる前、学会の打ち合わせにこられた京大会館のロビーで、「一度近い将来、一緒にフランスに行きませんか。そのときケネー研究家のお医者さんを是非紹介したい」とおっしゃった言葉も心に残る。平田さんは、この機会をもつことなく先立たれてしまわれた。私としては、無二の友人、この畏敬する研究者を失った悲しみは実に深い。これからは、落ちこんだ時、また悲しい時にも、彼の論著に散りばめられている珠玉のように美しい言葉を繙いて、白らの心を引き立てたり、ときには慰めたりしようと思う。最後に、そうした言葉のなかから一文を選んで書きしるしておきたい。

書は無心に読まなければ、読んだことにはならない。しかし読むとは、自分の生きる場や生き方をなんらかの意味で照らしだしてくれる思想の枠組みへの渇き

を離れてはありえぬ所業であろう。発見的 (heuristique) あるいは自己への問題設定 (problematique) として読むこと以外には、読むことの真髄はなく、このことによって読むことはそれ自身、現実への主体的介入になる、のではなかろうか。
(『市民社会とレギュレーション』241ページ)